

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 9 日現在

機関番号：32702

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02857

研究課題名(和文) ダイナミックシステム理論を援用した大学生の英語学習意欲発達に関する縦断的研究

研究課題名(英文) Longitudinal study of English learning motivation among Japanese college students: Utilizing dynamic system theories

研究代表者

菊地 恵太 (Kikuchi, Keita)

神奈川大学・外国語学部・教授

研究者番号：20434350

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、様々な社会的・個人的要因による学習意欲構造の変化や発達に配慮した大学での英語学習者育成のためのカリキュラム構築・学習支援のための指針の作成であった。

縦断的質的・量的研究の結果をまとめると、語学留学や大学での授業を通して英語に触れるものの、日ごろのサークル活動やアルバイトに多くの時間と労力を使うことも影響し、研究参加者は持続的な英語学習意欲を持ち続けることは難しかったようである。就職の際に必要な英語資格試験の学習ニーズは時に表出したが、英語話者と意思疎通を試みたいといったコミュニケーション意欲にはつながらず、国際社会で必要な英語力の習得のための意欲までは発達していかなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、昨今注目されている複雑性理論を援用し、日本人英語学習者の4年間の学習意欲の発達を分析した。本研究での分析により、18歳から22歳という年齢層に属する多くの大学生にとって英語学習が日常生活で行われる様々な活動の中で学習者のシステムを動かす動因となることは難しく、多くの学習者がアルバイト、サークル活動、就職活動といった自分たちの日常生活と強く関連する要因によって突き動かされることが多いことが示唆された。

研究成果の概要(英文)：In this project, varieties of individual motivational and societal factors among Japan college students learning English were studied. After the analysis of qualitative data obtained from a 4-year longitudinal study, it was found that participants appeared not to keep the motivation to study English for a long time due to their engagement with circle activities and part-time jobs. Towards the end of the 4-year period, in some cases, obtaining a high score on English certification tests could become a strong motivator. However, an analysis using Complex Dynamic Systems framework, indicated that that motivator did not become an attractor to change their system to motivate themselves to become an English user who wants to use English for a global society. Based on the findings, implications for the curriculum development and pedagogical practice were also explored.

研究分野：外国語教育

キーワード：動機づけ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本国内における英語学習者の学習動機とはどんなものであろうか。本研究では特に大学生の学習動機の変容に着目した。筆者はこれまで中高における学習動機の減退要因やコミュニケーションを目的とした英語教育における学習動機高揚・減退要因に関する調査に携わってきた。その中で日本人大学生の動機付け構造に強く興味を持ち始めた。例えば、Dörnyei (2005)の提唱した L2 セルフ・システム理論では、外国語(L2)を学ぶ上での学習動機の要因は、理想自己(こうありたいという自分)、義務自己(こうなるべきだという自分)、学習経験(学習者の外国語学習経験)の3要素を軸に学習者の動機付け構造を捉えようとしている。しかし、本研究の研究対象者である日本人大学生の場合、日本を飛び出して海外に移住して現地に暮らしてみたいとか英語を駆使して世界旅行をしたいといった理想を持ち、そういった自分を強くイメージしたりすること(理想自己)、またそのためには大学での様々な英語授業を積極的に履修して自分の語学力を高めるべきだ、TOEIC といった資格試験のスコアを伸ばすべきだといった意識を持つこと(義務自己)が動機付けにつながるとされている。しかし、そういった確固した自己を持ち、周りに流されることなく、学習意欲を持続できる学生はどれだけいるであろうか。そういった学生の場合、履修している授業内でも積極的に発言をし、授業外でも課題をこなすのはもちろんのこと、英語を駆使して人と会話する機会や英語でのニュースや情報サイトに常にチェックする(学習経験)など英語に没頭する時間も日常多くあるであろう。そういった学生が自分の担当授業に数名でもいれば教師にとって教えがいのある授業となりうるであろう。

一方、多くの大学生にとって授業以外で日常的に英語を使う場面は少なく、海外旅行や海外からの旅行者と意思疎通を図るといった場面はそれほど多くない。専門分野に関して英語での原著論文を与えられてもそれに没頭し、さらに読みたいと意欲を持つよりは課題だからテストに出るからといった理由で仕方なく辞書を駆使して読んでいる学生は多いであろう。そういった学生は果たしてどのような理想自己や義務自己を描き、どのような学習経験を体験するのだろうか。本研究の出発点はそういった疑問から始まった。

研究を開始した平成 28 年頃、日本国内での英語学習におけるモチベーション研究では、常に学習意欲が変化しつづける学習者をダイナミック・システム理論を使い、捉えなおすという研究が盛んになりつつあった(例: Hiromori, 2014; Ryan and Irie, 2014; Yashima and Arano, 2014; Kikuchi, 2015)。この理論では、我々の行動の複雑な発達プロセスを時間軸に沿って詳細に記述することによって、その変化のパターンを見つけ出しながら、その変化がどのようにして起こるのか、背景にあるメカニズムは何か、どのような条件下でその変化は起きているのかなどを明らかにすることを目指している。本研究では、L2 セルフ・システム理論とダイナミック・システム理論の双方を用い、4年間の在学中、大学生の英語学習意欲はどのように変化し、どのような要因で多くの理想自己や義務自己が高くない学生を指導できるのかを考察するという研究課題にたどり着いた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、様々な社会的・個人的要因による学習意欲構造の変化や発達に配慮した大学での英語学習者育成のためのカリキュラム構築・学習支援のための指針の作成である。その為に(1) 大学1年次から4年次までの英語学習者の学習動機構造をダイナミック・システム理論に照らし合わせて分析し、(2) 大学在学中に英語学習意欲に影響する要因にどのようなものがあるかを明らかにし、(3) 大学のファカリティ・ディベロプメントでの使用を視野に入れ、本研究の知見に基づいたカリキュラム構築・学習支援のための研究書・マニュアルの作成を行うというものであった。

3. 研究の方法

研究手法としては、大学2年次から4年次までの英語学習者の継続的な聞き取り調査や質問紙調査、また授業観察を行う。またその縦断的調査に基づき、質問紙を作成した。

4. 研究成果

(1) インタビューに基づく縦断的質的・量的研究

まず、縦断的量的研究の成果をまとめる。L2 セルフ・システムに関しては Criterion Measure (Mot), Ideal L2 Self (Ids), Ought-to L2 Self (Ots), Attitudes to Learning English (AttL), Instrumentality-Promotion (InPrm), Instrumentality-Prevention (InPrv), Cultural Interest (CI) and Attitudes to the L2 community (AttC)の8つの観点をを用いて分析した。英語学習者のダイナミックシステムの変化に関しては Dynamic Ensemble (Hiver and Al Hoorie, 2016)に基づく7つの観点(1. Context, 2. Systemic networks, 3. Dynamic process, 4. Emergent outcomes, 5. Components, 6. Interactions, 7. Parameters)から分析した。

以下、図1から図4は Kikuchi (2019)で発表したものの一部で4年間の在学中の2年分のセルフシステムの変化を表している。縦軸はすでに述べたセルフ・システム理論に基づく8つの観点に関する質問紙の各項目別の平均値で、横軸は1年次から2年次の春学期(S)/秋学期(F)の16時点の変化を表している。参加者は、首都圏私立大学に通う4名の学生(Asako, Nana, Tamami, Yuki いずれも仮名)で、大学入学時に留学に興味があると英語学習の一定のモチベーションを示している。

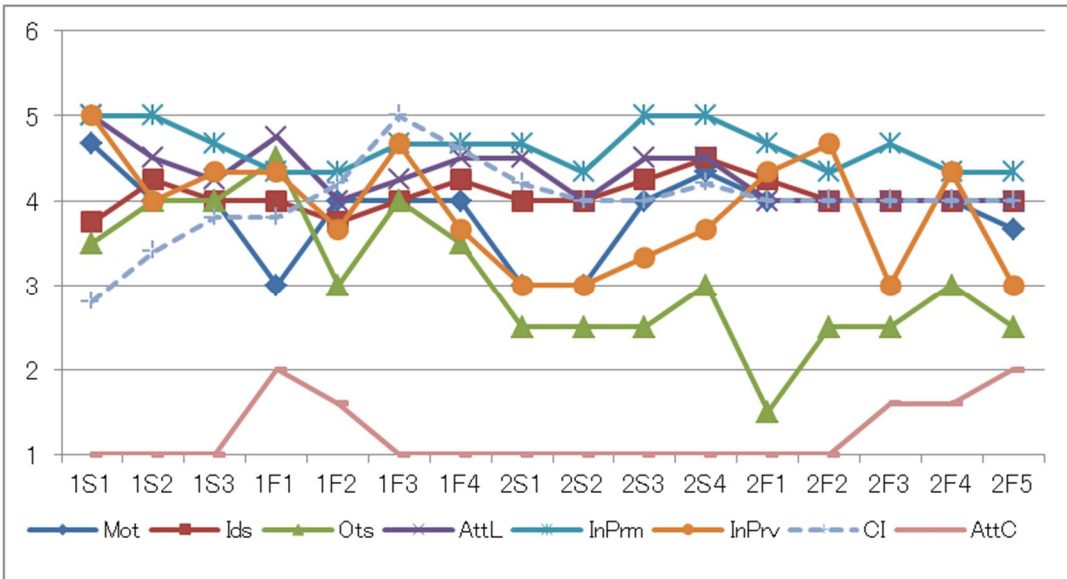


図 1 : Asako の 2 年間の L2 セルフ・システムの変化

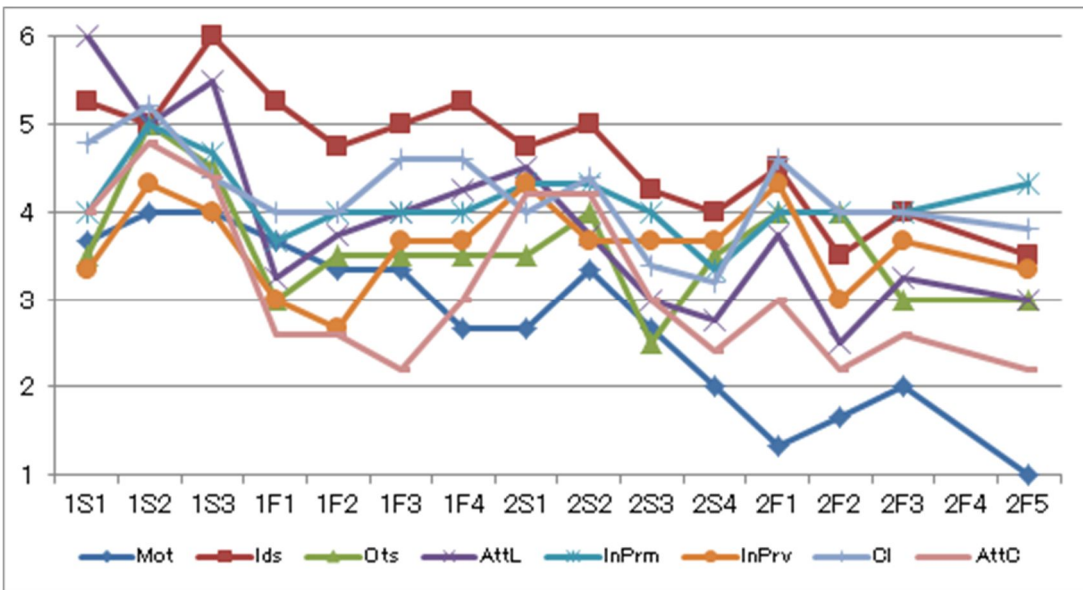


図 2 : Nana の 2 年間のモチベーションの変化

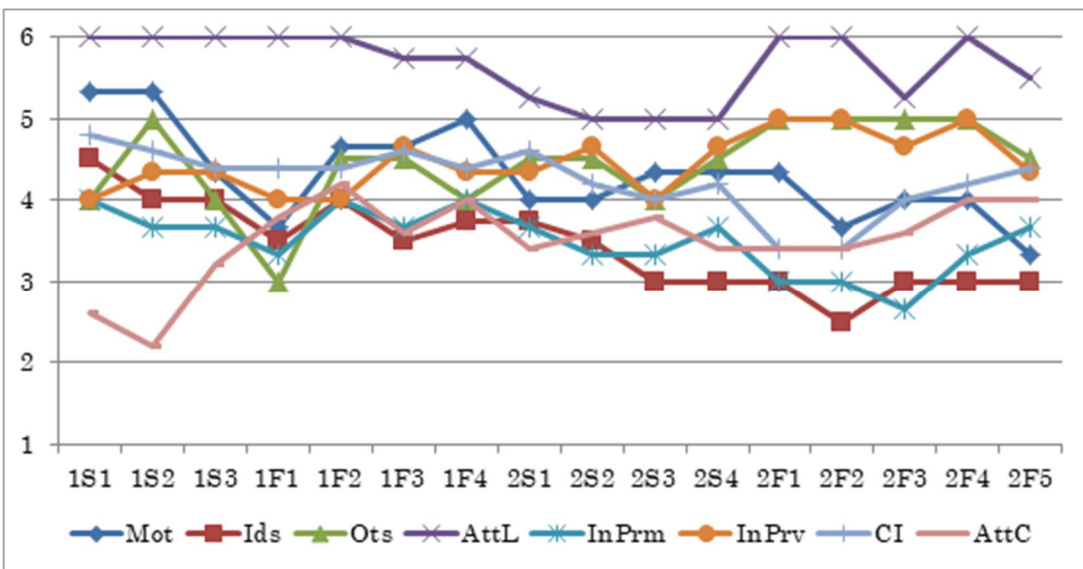


図 3 : Tamami の 2 年間の L2 セルフ・システムの変化

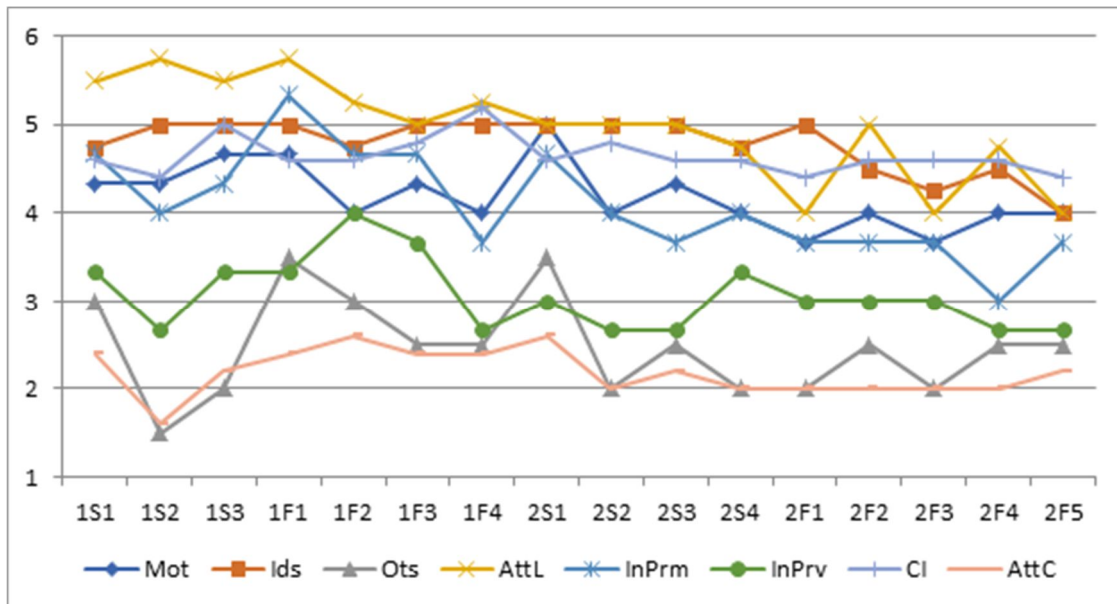


図 4: Yuki の 2 年間の L2 セルフ・システムの変化

図 1 から 4 をみるとわかるように各参加者はそれぞれ異なる特徴を持っていた。例えば、Asako は義務的自己(Ots)の減少が顕著でまた英語話者のコミュニティへの態度(AttC)は常に低かった。また、Nana は入学時に比べて特に理想的自己(Ids)や学習意欲(Mot)の減少が顕著である。Tamami は英語学習に対する態度(AttL)が一定に高く他の要素に関しても特に減少することなく一定に保っている。Yuki は英語学習に対する態度(AttL)に関してはある程度の減少を示しているものの各項目別の変化はあまりなかった。なお、Asako 同様、英語話者のコミュニティへの態度(AttC)に関してはほかの項目より低かった。

次にDynamic Ensembleの7つの観点(1. Context, 2. Systemic networks, 3. Dynamic process, 4. Emergent outcomes, 5. Components, 6. Interactions, 7. Parameters)を用いた分析に移る。スペースの関係上、5 から 7 に関してはKikuchi (2019)に詳細に述べたので今回は省くものとする。

まず Context と Systemic Networks を取り上げる。4 名ともに共通するのは、同じ大学で全く同じ学科に所属していた一方、大学入学の際の入試形態が異なり、また出身地も異なるといったところである。共通していたのは筆者が 1 年生前期に開講していた留学に必要な資格試験対策講座に参加していたことだが、4 名とも課題への取り組みや、受講姿勢も異なるが、授業中に参加者を募ったところ自発的に本研究プロジェクトへの参加を表明してくれた。入学後 Nana と Yuki は同じ英語系サークル(ESS)に入ったが、Asako と Tamami は特に部活やサークル加入に興味を示したものの大学生活以外ではアルバイトに没頭することが多かった。なお全員が英語留学を経験した点は共通している。Tamami と Yuki はカナダに数週間、他の同学科学生と一緒に 1 年生と 2 年生の間の春休みに渡航した。Asako は 2 年の夏休みにフィリピンのセブ島にまた Nana は 4 年次に休学をしてオーストラリアに半年の留学をした。

次に Dynamic Processes と Emergent Outcomes に移る。Nana に関しては留学から戻ってきた後、連絡がとれなくなったので不明だが、他の 3 名は数週間の語学留学から帰ってきた後、それによってもう一度留学したいと考えることはなかったというのが興味深かった。大学入学時に持っていた英語圏留学への興味が留学前、留学中の学習意欲につながったものの、一度語学留学から帰国してしまうと Tamami と Yuki は「もう留学はいい」とはっきりとインタビューで述べてそれぞれアルバイトとサークル活動に没頭する大学生活に入ったようである。Asako はフィリピンから帰国後、現地で知り合った日本人の年上の友人と何回か食事をしたり、影響を受けることが多いとしばらく言っていたが、彼女もそのうちアルバイトと大学の授業に力を向けることとなった。なお、Asako はあまり何かに没頭することは就職活動前にはなかった一方、他の 3 名はサークル活動かアルバイトに没頭することが多かった。なお、やはり就職活動は参加者のダイナミックシステムの転換点として次に大きいものであろう。Asako ははじめ日系航空会社を志望し、英語資格試験の点数を挙げることにかなり没頭したと述べていた。しかし、面接が通らず、それ以降は英語学習に力を傾けることはなくなった。Tamami と Yuki は英語を使った就職先は念頭にないということで 3 年生の後期から 4 年次にかけては英語に関しての言及が調査中、減っていった。ただ、Tamami は英会話学校の受付として就職することが決まり、その後は英語もやらなければ...と発言していた。留学後、連絡をとれなくなった Nana を除くと全員英語は日本に来た外国人と話す、あるいは海外旅行に行った際に使えばよく

らいだというアトラクター・ステーツに落ち着いた。

インタビューに基づく縦断的質的・量的研究の結果を簡単にまとめると語学留学や大学での授業を通して英語に触れるものの、大学生の生活は日ごろのサークル活動やアルバイトに多くの時間と労力を使うことも影響し、持続的な英語学習意欲を持ち続けることは難しかったようである。就職の際に英語資格試験のための学習をする場合も出てくるが、そういったケースでも英語を用いて英語話者と意思疎通をしてみたいといった意欲にはつながらず、日常の大学やアルバイト先での対人関係、就職活動といった要素に関して参加者とのインタビューでは多く聞くことが多かった。

(2) 今後の研究への示唆

以上に基づいた質問紙作成およびカリキュラム構築のために準備をすすめていたが、本年度末は新型コロナ感染拡大の影響で予定されていた専門家相談と質問紙のパイロット・スタディーができなかった。収束後、それらの作業を行う予定だが、以下に4年間の本研究に基づく研究への示唆を記す。まず(1)に記した縦断的質的・量的研究の後、大規模な横断的調査に使用する質問紙を開発する予定だったが、当初イメージしていた多肢選択式の質問紙から自由回答式のものと変更せざるを得なかった。例えば、ある最新の研究(Papi and Hiver, 2020)では本研究同様6名の大学院生にダイナミックシステムに基づき今までの英語学習に関して調査を行っているが、The initial conditions と Change in and across different phases of the process in home country に関して12の項目からなるインタビューガイドを公開している。本研究では、入試形態(推薦入試か一般入試)、短期・長期語学留学の有無、アルバイト・サークル活動、就職活動、周りの友人の影響がダイナミックシステムに影響することがわかったが、それに基づき質問紙を開発する場合、それぞれの項目に関して個々により細かい・多岐に渡る内容を聞く必要があるため自由回答式が好ましい。今回の研究で使用したL2セルフ・システムに基づく多肢選択式の質問紙と併用して使うのが好ましいであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Keita Kikuchi	4. 巻 Vol 9, No 1
2. 論文標題 Motivation and demotivation over two years: A case study of English language learners in Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies in Second Language Learning and Teaching	6. 最初と最後の頁 157-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.14746/ssllt.2019.9.1.7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Keita Kikuchi
2. 発表標題 Longitudinal narrative studies of Japanese learners of English: Changes of Ideal L2 self, Ought-to L2 self, and L2 learning experience
3. 学会等名 American Association For Applied Linguistics（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 J. Lake and Keita Kikuchi
2. 発表標題 Using Rating Scales and Rasch Analysis in the Development of a Model of Positive L2 Self
3. 学会等名 日本言語テスト学会第 21 回全国研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Keita Kikuchi
2. 発表標題 What do we need to know about motivation and demotivation in language learning?
3. 学会等名 the Irish Association for Applied Linguistics
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Keita Kikuchi
2. 発表標題 Researching learners' motivation using the L2 motivational system: A survey study
3. 学会等名 5th ICLEHI 2017 Kuala Lumpur (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Keita Kikuchi
2. 発表標題 Revisng the L2 Motivational self-system: A one size fits all theory or not
3. 学会等名 The IAFOR International Conference on Language Learning (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Keita Kikuchi
2. 発表標題 Two years in a Japanese college: Looking into English learners' motivation and their social life
3. 学会等名 JACET Learner Development SIG Spring Seminar (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考